

研 究 分 野	資源生態	部名	漁業開発部
研 究 課 題 名	沿岸漁場整備開発調査 ウスメバル増殖試験		
予 算 区 分	水産基盤整備費		
試験研究実施年度・研究期間	H.11 ～		
担 当	菊谷 尚久		
協 力 ・ 分 担 関 係	青森市水産指導センター		

〈目的〉

陸奥湾内に着底したウスメバル稚魚の生態を把握することにより、漁獲対象資源であるウスメバルにはたす陸奥湾の役割を解明し、今後のウスメバル資源の保護及び増大についての知見を得ることを目的とする。

〈試験研究方法〉

1.標識放流試験（中間育成魚：青森市水産指導センター）

2002年6月に青森市奥内沿岸の養殖施設周辺に蛸集していたウスメバル稚魚を採集し、青森市水産指導センター内で中間育成して標識放流用の材料とした。標識放流は2003年6月6日に実施し、平舘村前沖の平舘ブイ周辺の天然礁上(D=65m)において1,892尾のウスメバル幼魚を船上放流した。

2.標識放流試験（現場放流）

2003年9～11月に、陸奥湾口部の脇野沢前沖において、釣により漁獲されたウスメバル未成魚（1～3歳魚）に標識を装着し、水圧付加手法1)により合計で236尾の標識放流を行った。

〈結果の概要・要約〉

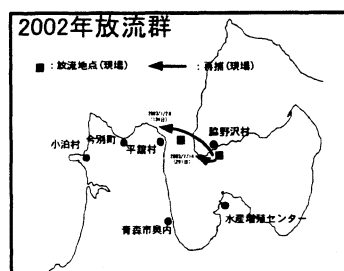
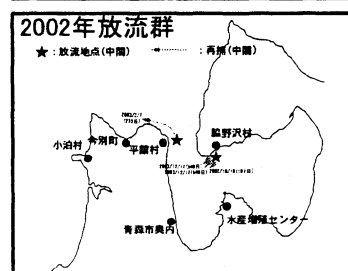
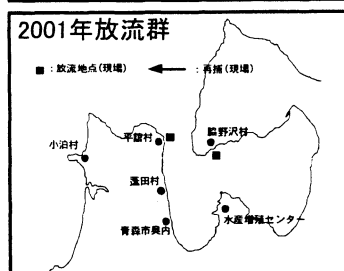
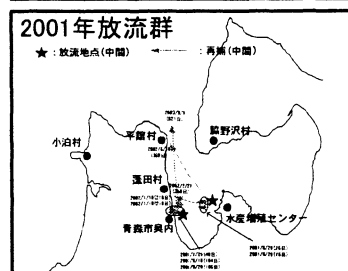
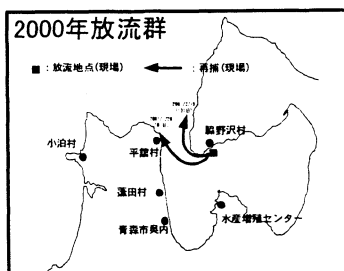
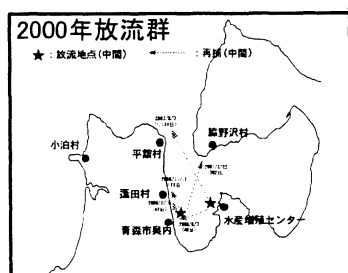
現在までに再捕されたのは、2000年放流では、青森ブイ放流群5尾、奥内放流群7尾、脇野沢放流群2尾の合計14尾、2001年放流では、青森ブイ放流群4尾、指導センター放流群8尾の合計12尾、2002年放流では、平舘ブイ放流群6尾、脇野沢放流群(中間)3尾、脇野沢放流群(現場)3尾の合計12尾であり、2003年放流群は未再捕であった。放流後の経過日数が最大であったのは、2003年9月3日に平舘沖魚礁(水深95m)周辺において再捕された2000年青森ブイ放流群のうちの1尾の1,174日であった。

中間育成魚の再捕結果(図1)からは、春季に陸奥湾奥部に放流されたウスメバル幼魚は、秋季から冬季にかけて津軽半島東岸を湾口方向へと移動し、約1年後となる翌春には湾口部周辺へ到達するものと推察された。青森市奥内地区では、10月頃にTL60～70mm前後のウスメバル当歳魚が大量にホタテ養殖かごに混入することを確認しているが、これらの当歳魚は湾奥部から移動途中の稚魚が奥内沖に出現したものであると考えられた。そして、湾口部に到達した未成魚はその後湾外へと移動し、主として津軽海峡沿岸部を日本海方向へと移動していくものと推察された。

湾内でみられるウスメバル未成魚の移動は、陸奥湾における秋季の高水温、及び冬季の低水温からの逃避行動がきっかけとなり、湾奥から湾口へ、そしてさらに湾外へと移動していくものと考えられた。

陸奥湾はウスメバル稚仔の保護・養成的役割を果たす「ゆりかご」とであると位置付けられる。また、ウスメバルに限らず本県周辺の多くの魚類の資源を支えている可能性が考えられる。

〈主要成果の具体的なデータ〉

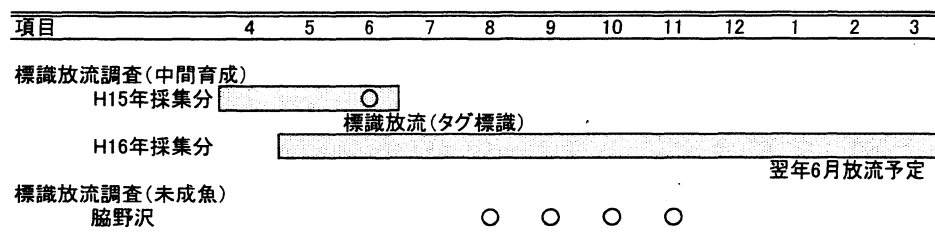


ミでの日数

〈今後の問題点〉

- ・ 本県ウスメバル資源の主体をなす日本海の資源との関係についての検討。
- ・ 陸奥湾の「ゆりかご」効果を維持・増大させるための方策の検討。

〈次年度の具体的計画〉



〈結果の発表・活用状況等〉

- ・ 調査結果は各種学習会や成果報告会などで発表。
- ・ 水産基盤整備事業の事業計画策定のための資料として活用。